

5	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14101007	グローバル化時代における国際犯罪と人間の安全保障に関する総合研究	上田 寛 (立命館大学・法学部・教授)	B
<p>(意見等)</p> <p>海外調査・合同研究会および国際シンポジウムは概ね着実に実施されているものと認められる。他方、それを深める研究がどの程度実質的に達成されているかは判然としない。現段階で公表されている論文等は、本研究目的に直結する成果としては質量ともに十分なものとはいえない。もともと、5年間にわたる研究の2年目を終えた段階であり、成果として結実するのは今後であると思われる。きわめて巨大で高度な課題に取り組む研究であるだけに、研究組織体制を一大学の枠を越えて拡充し、また、とりわけ「人間の安全保障」に関わる研究分担者の数・専門領域の幅を十分なものにしていただきたい。莫大な研究経費に対応しうる研究成果の達成に向けて、一層の努力に期待したい。</p>				
6	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14101009	社会経済への浸透過程における技術の性格形成メカニズム（製造技術とITとの比較分析）	渡辺 千帆 (東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授)	A
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、1990年代以降のITの革新・活用でアメリカなどに大きく立ち遅れている日本の経済社会の問題点を、社会経済体質の硬直化とITの成果を十全に活用できない経済の停滞との悪循環のうちに認めて、その原因とメカニズムを国際比較、技術地政学、比較制度論などを駆使して解明しようとするものである。研究代表者はこの立ち遅れの原因は、社会経済への浸透過程における製造技術とITとの性格形成の過程の差異に求められるという仮説に基づいて、本研究を推進しようとしている。国際共同研究はまずまず順調に進展しているように見受けられ、過去2年間の研究代表者の研究成果は国際学術雑誌論文だけでも36編に及んでいる。とはいえ、研究の中核にある「社会経済体質」(インスティテューション)という概念の学問的成熟度や、国際共同研究者との理解の共有度に多少の疑問の余地が残されているうえに、研究代表者の発表論文の共同執筆者の大部分が、この研究プロジェクトの共同研究者には含まれていない一方において、明示的な共同研究者との共同論文がないなど、研究組織の機能様式とその有効性に関しても、必ずしも明らかではない点がある。これらの疑問点に関しては、今後の研究の成熟に際して、納得できる形で解消されることを期待したい。</p>				